原市４号墳発掘調査報告書

――鈴与トラックステーション株式会社ガソリンスタンド建設に伴う
原市４号墳埋蔵文化財発掘調査報告書――

２００７

安中市埋蔵文化財発掘調査団

原市４号墳発掘調査報告書

――鈴与トラックステーション株式会社ガソリンスタンド建設に伴う
原市４号墳埋蔵文化財発掘調査報告書――

２００７

安中市埋蔵文化財発掘調査団

遺　跡　全　景

序

安中市は群馬県の南西部に位置し、上毛三山に囲まれ、妙義山の東麓に広がる田園都市です。市内を流れる碓氷川とその支流によって形成された河岸段丘上には、悠久の昔から私たち祖先の残した遺跡が数多く存在しています。

原市４号墳は、安中市内の郷原、碓氷川左岸の中位段丘面上に所在しています。まわりには、原市１号墳・原市３号墳・原市５号墳などが分布していて、郷原古墳群と呼ばれる一つの古墳群を形成しています。

原市３号墳・４号墳・５号墳は昭和45年に調査が行われていましたが、今回はその時の未調査部分の発掘調査を行いました。原市３号墳・５号墳はすでに削平されていましたが、原市４号墳は古墳の基壇面と周堀が発見されました。周堀内からは埴輪が出土し、大型の家型埴輪が復元できました。

発掘調査は、貴重な文化財を後世に残すことを目的とし、記録保存の措置を講ずるものです。こうした埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であり、市民のみなさまに郷土の歴史を学習していただけるよう広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めていく所存です。

終わりに、長期に渡る発掘調査に御協力いただいた地元の皆様や、安中市の文化財行政の一端を担い、発掘調査に従事していただいた方々には、この場を借りて感謝の意を表したいと存じます。

平成19年３月

安中市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　**中　澤　四　郎**

例　　言

1　本書は、鈴与トラックステーション株式会社が行うガソリンスタンド建設に伴う原市４号墳（略称Ｃ―21）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成18年２月28日から３月31日の間実施した。遺物整理は発掘調査終了後から平成18年度の間実施した。

3　発掘調査主体は安中市埋蔵文化財発掘調査団であり、調査は安中市学習の森文化財係主査（文化財保護主事）千田茂雄が発掘調査員として担当した。

4　遺物整理及び本書の編集・執筆等は千田が行った。

5　遺構の写真撮影は千田が行った。航空写真はスナガ環境測設株式会社に委託して行った。

6　遺構の版組、写真図版の作成は、千田、鬼形敦子が行った。

7　土器実測・トレース・属性表作成は千田、鬼形が行った。

8　遺物写真撮影は千田、鬼形が行った。

9　調査区の国家座標取付及び、測量基準杭の設置は㈱桜井測量設計が実施した。

10　今回の調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

11　調査及び遺物整理の期間中多くの方々に有益な指導、助言、協力を行っていただいた。また発掘調査及び遺物整理に従事していただいた方に厚くお礼申し上げます。

調査組織

平成17年度

安中市埋蔵文化財発掘調査団

団　　長　高　橋　重　治
副 団 長　佐　藤　伸太郎
事務局長　大　野　孝　一
事務局次長　藤　巻　正　勝
調 査 員　千　田　茂　雄（調査担当）
　同　　深　町　　真
　同　　井　上　慎　也

平成18年度

安中市埋蔵文化財発掘調査団

団　　長　中　澤　四　郎
副 団 長　佐　藤　伸太郎
事務局長　大　野　孝　一
事務局次長　藤　巻　正　勝
調 査 員　壁　　伸　明
　同　　千　田　茂　雄（調査担当）
　同　　深　町　　真
　同　　井　上　慎　也

凡　　例

1．原市４号墳全体図の縮尺は１／160である。
2．遺物の縮尺は１／４・１／８である。
3．土層説明中での記号、略称は次の通りである。
　色調＜：より明るい方向を示す（例１＜２：１より２の方が明るい）
　しまり、粘性　◎：あり、○：ややあり、△：あまりない、×：なし
　混入物　◎：大量、○：多量、△：少量、＊：若干、×：なし、
　WP：白色粒子、YP（As―YP）：板鼻黄色軽石層、RP：ローム粒子、RB：ロームブロック、
　B（As―B）：浅間B軽石、BP：板鼻褐色軽石層

本 文 目 次

序
例　　言
凡　　例
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　調査の方法と経過……1
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境……2
Ⅳ　層　　序……7
Ⅴ　遺跡概要……8
Ⅵ　遺構と遺物……8
Ⅶ　成果と問題点……16

挿図目次

第1図　原市4号墳と周辺遺跡の位置……3
第2図　原市4号墳調査区設定図……6
第3図　基本層序柱状図……7
第4図　原市4号墳全体図……9
第5図　原市4号墳出土遺物(1)……11
第6図　原市4号墳出土遺物(2)……12
第7図　原市4号墳出土遺物(3)……13
第8図　原市4号墳全体図……17
第9図　原市4号墳石室展開図……17

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表(1)……4
第2表　周辺遺跡一覧表(2)……5
第3表　基本層序土層説明……7
第4表　遺物観察表(1)……15
第5表　遺物観察表(2)……15

写真図版目次

図版1　遺跡遠景　遺跡全景
図版2　原市4号墳全景
南側　葺石・周堀検出状況
北西側　葺石・周堀検出状況
西側　葺石・周堀検出状況
遺物出土状況
図版3　No.1　No.3　No.4　No.5　No.6　No.7
図版4　No.8　No.9　No.10
図版5　No.2
図版6　No.2

Ⅰ　調査に至る経過

平成18年１月、鈴与トラックステーション株式会社が行うガソリンスタンド建設計画について鈴与トラックステーション株式会社より、事業計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについての照会があり、事前協議を行った。

当該地区は旧原市町３・４・５号墳の存在が早くから知られており、その一部分について昭和45年に発掘調査が実施されている。今回の開発に当たり、昭和45年調査の未調査部分へ影響が及ぶため、その取り扱いについて協議を行った。しかし、計画変更を行っても遺跡への影響の回避はむずかしいことから、事業実施により埋蔵文化財に影響を受ける部分について発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

Ⅱ　調査の方法と経過

調査はまず、発掘調査区全域をカバーするようにグリッドの設定を行った。グリッドは、１グリッドが４ｍ×４ｍで北西隅を基点とし、北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…西から東へ１，２，３…と呼称するようにした。また、グリッドをさらに四分した２ｍ×２ｍの細グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でａ、ｂ、ｃ、ｄと呼称することにした。そして、座標値は国家座標に取り付けた。国家座標値は、Ｂ－５グリッドがＸ＝34398.515、Ｙ＝－90581.508、Ｆ－５グリッドがＸ＝34382.747、Ｙ＝－90584.222である。

調査はバックホーによりⅡｂ層上面及びⅢ層上面まで掘削し、その後人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。確認された遺構は順次精査を行い、調査区全体の航空写真撮影を業者に委託して実施した。遺構及び全体の平面図は航空写真を利用した方法で行った。土層断面図は、それぞれ必要に応じ縮尺１／40を基本として従来の方法で作成した。また、必要に応じて、遺構・遺物の写真撮影を行った。

遺物整理は、発掘調査の終了後から平成18年度までの間断続的に実施した。

作業は、遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース・写真撮影の順で行い、並行して遺構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行った。

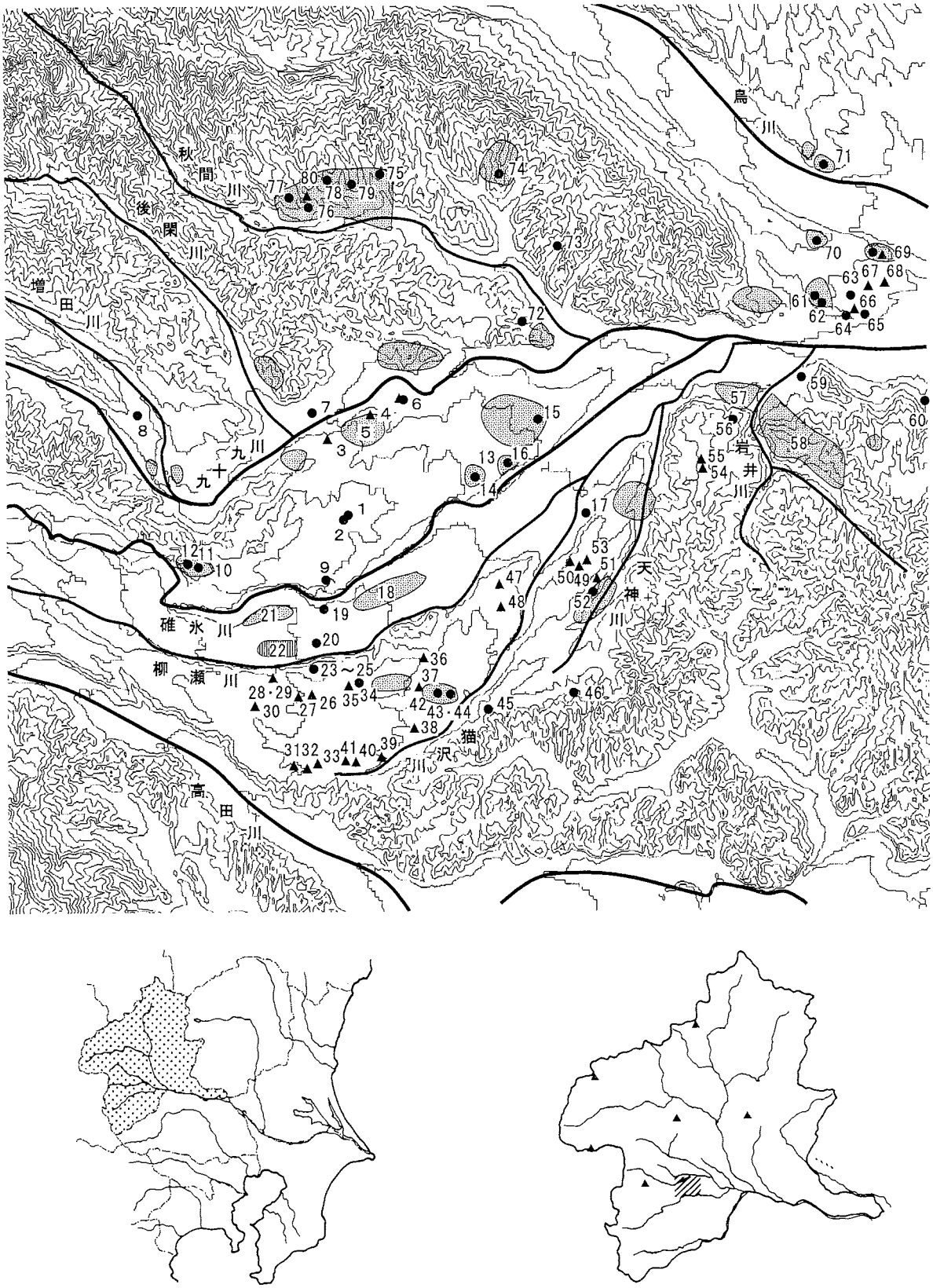
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する（第１図）。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側にはこれと並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部地区）、中位段丘（原市・安中地区）、上位段丘（東横野地区）が存在する。また、市の北部や南東部等には丘陵（秋間丘陵・岩野谷丘陵・松井田丘陵）が分布する。

原市４号墳は郷原、碓氷川左岸の中位段丘面上に位置する。標高は約270mを測る。そして本墳の東約50mには原市１号墳が、西約25mには原市３号墳（削平により現在消滅）が、西南約25mには原市５号墳（削平により現在消滅）がそれぞれ位置している。昭和13年に発行された『上毛古墳総覧』によると、原市１号墳を中心に径10mほどの円墳が西側に４基、東側に５基分布し、一つの古墳群（郷原古墳群）を形成していたようである。碓氷川と九十九川に挟まれた原市・安中台地にはこの郷原古墳群の他、東悪途古墳群（悪途東・天王西地区）等の群集墳や簗瀬二子塚古墳などが点在する。また旧安中町にも多数の古墳が分布し、古墳群が形成されている。この台地の中央には清水遺跡(集落跡)、九十九川右岸沿いで嶺・下原遺跡（後期集落)、杉名薬師遺跡（集落跡)、高橋遺跡（集落跡・古墳）等が存在する。

九十九川左岸の低地には簗瀬二子塚古墳との関連性がある後閑３号墳、下増田上田中遺跡１号墳（松井田町国衙）や山寺古墳群等が存在する。碓氷川右岸の下位段丘には中期古墳が発見された塩ノ久保遺跡をはじめとする磯部古墳群が存在し、西上磯部の上位段丘縁辺部に中期古墳とされる旧磯部町２号墳及び長谷津向山古墳が存在する。大王寺地区遺跡群（新寺地区遺跡群等）では古墳時代中期～後期の集落跡、田中田・久保田遺跡では中期の方形周溝墓状の遺構が検出されている。上位段丘にある中野谷地区遺跡群では中野谷古墳群が存在する。下宿東遺跡（前期)、蔵畑遺跡（前期)、天神原遺跡（中期)、中島遺跡（前期・後期)、原遺跡（中・後期)、北東・堤下遺跡（後期)、荒神平・吹上遺跡（中・後期)、上ノ久保遺跡（後期)、諏訪ノ木遺跡（中・後期)、下原・賽紳遺跡（中・後期)、堀谷戸遺跡で集落が確認されているが、拠点的な大規模集落は少ない。岩野谷丘陵では多数の古墳が分布する。大形円墳である経塚古墳、岩野谷57号墳をはじめとする市内でも古い古墳が分布する地域である。秋間丘陵には後期以降の古墳が多数分布し、終末期古墳の特徴である截石切組積の横穴式石室をもつ古墳やこの地域では少ない横穴墓、小型石棺が存在する。

安中市に分布する古墳の時期は碓氷川右岸の岩野谷丘陵から横野台地にかけて市内でも古い中期古墳及び終末期までの古墳が多数分布し、地域ごとに古墳群が形成されている。原市・安中台地及び九十九川沿岸の低地部では簗瀬二子塚古墳及び後閑３号墳をはじめとする後期初頭の古墳が出現し、終末期までの古墳が分布する。秋間丘陵には終末期に特徴をもつ古墳が多数分布する。



第１図　原市４号墳と周辺遺跡の位置

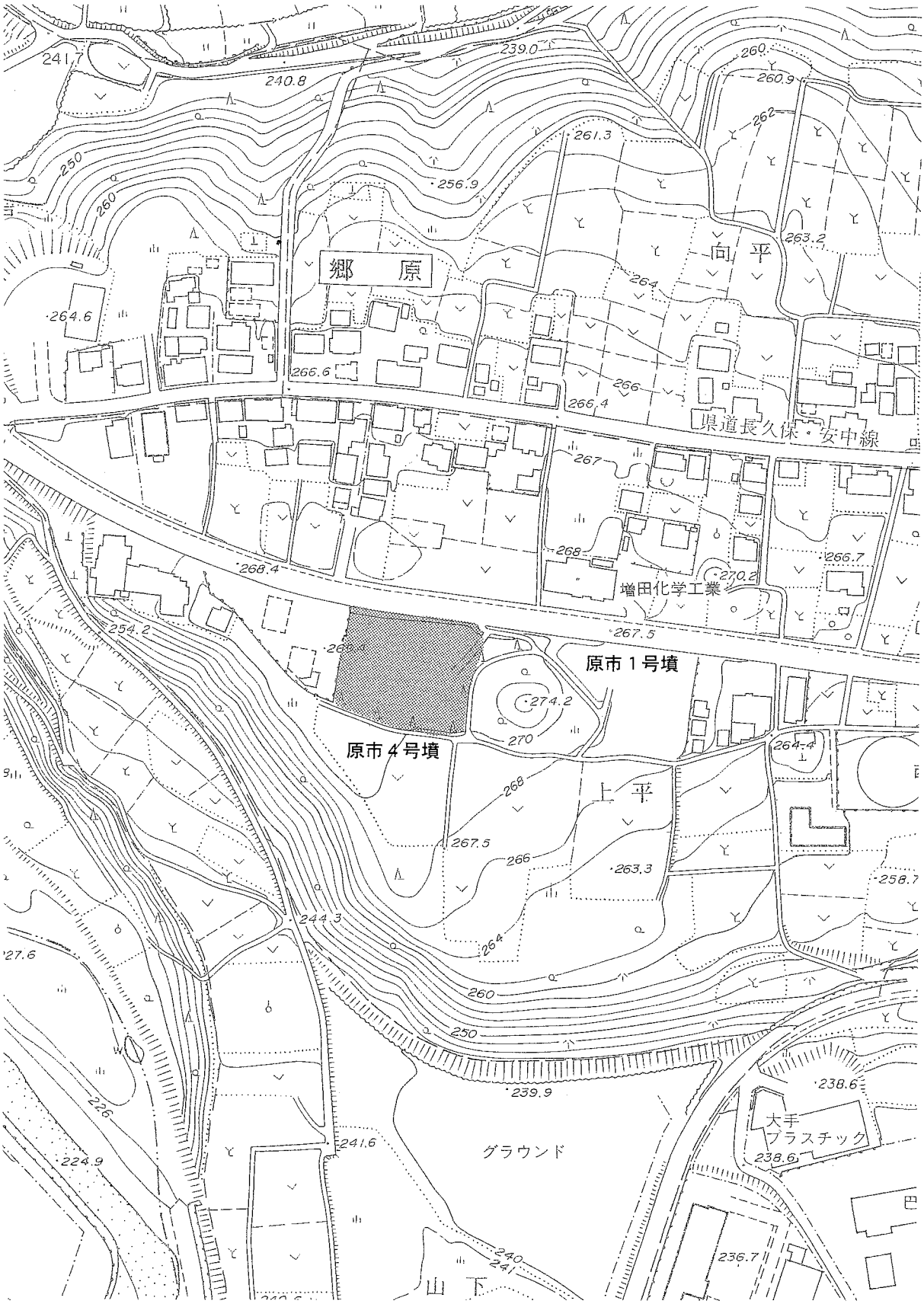
第１表　周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺　跡　名	遺跡の種類	立　地	古　墳				備　考
				前	中	後	終	
1	簗瀬二子塚古墳	古　墳	中位段丘			◎		原市13号墳
2	首塚古墳	古　墳	中位段丘			◎		原市12号墳
3	嶺・下原	集　落	中位段丘		○		○	
4	杉名薬師	集　落	中位段丘	○	○	○	○	
5	杉名古墳群	古　墳	中位段丘			◎		
6	高橋	集落・古墳	河川低地	◎	○	◎		群集墳
7	後閑３号墳	古　墳	河川低地			◎		円墳（Ｔ字型横穴式石室）
8	下増田上田中	古　墳	下位段丘			◎		円墳（Ｔ字型横穴式石室）
9	東下毛山古墳	古　墳	中位段丘					円墳
10	郷原古墳群	古　墳	中位段丘			◎		
11	原市１号墳	古　墳	中位段丘			◎		円墳
12	原市４号墳	古　墳	中位段丘			◎		円墳
13	東悪途古墳群	古　墳	中位段丘			◎	◎	
14	悪途東Ｋ－１号墳	古　墳	中位段丘				◎	円墳、悪途東古墳群
15	安中４号墳	古　墳	中位段丘			◎		稲荷神社古墳（円墳）
16	安中６号墳	古　墳	中位段丘			◎		円墳、給人畑古墳群
17	経塚古墳	古　墳	下位段丘			◎		磯部12号墳、円墳
18	磯部古墳群	古　墳	下位段丘			◎		
19	塩ノ久保Ｋ－１号墳	古　墳	下位段丘		◎			円墳
20	田中田・久保田	古　墳？	下位段丘		◎			方形周溝遺構
21	塚原古墳群	古　墳	下位段丘			◎		17号墳（前方後円墳）
22	大王寺地区遺跡群	集　落	下位段丘	○	○	◎	◎	新寺地区遺跡群、松井田工業団地遺跡他
23	磯部２号墳	古　墳	上位段丘		◎			円墳（竪穴式石室）
24	磯部３号墳	古　墳	上位段丘					前方後円墳（竪穴式石室）
25	長谷津向山古墳	古　墳	上位段丘		◎			円墳（竪穴式石室、石製模造品）
26	中島	集　落	上位段丘	○		◎		
27	砂押原	集　落	上位段丘			○		
28	中野谷原	集　落	上位段丘		○	◎		鍛冶工房、炭焼土坑
29	上北原	集　落	上位段丘		○	○		
30	人見東原	集　落	上位段丘	○		○		
31	人見大谷津遺跡	集　落	上位段丘	◎				
32	下高田遺跡群	集　落	上位段丘			○	○	
33	向原	集　落	上位段丘			○		
34	中野谷松原	古　墳	上位段丘				◎	円墳１基
35	天神原	集　落	上位段丘		○			
36	北東・堤下	集　落	上位段丘			◎	○	
37	下塚田	集　落	上位段丘				○	鍛冶工房
38	中原	集　落	上位段丘		○			
39	下宿東	集　落	上位段丘	◎				
40	細田	集　落	上位段丘		○	○	○	

第２表　周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺　跡　名	遺跡の種類	立　地	古　墳				備　考
				前	中	後	終	
41	和久田	集　落	上位段丘		○			
42	平塚	古　墳	上位段丘				◎	円墳２基
43	落合Ⅱ	古　墳	上位段丘				△	円墳１基
44	落合	古墳・溜井	上位段丘			△	△	円墳１基、溜井遺構
45	注連引原Ⅱ遺跡	古　墳	上位段丘	◎				円墳（円形周溝遺構）２基
46	経塚古墳	古　墳	上位段丘		◎			東横野12号墳（円墳、竪穴系石室、石製模造品）
47	荒神平・吹上	集　落	上位段丘	◎	○	◎	◎	
48	上ノ久保	集　落	上位段丘			○	○	
49	蔵畑	集　落	上位段丘	○		○		終末段階・滑石製模造品製作・溝
50	諏訪ノ木	集　落	上位段丘	◎	○	○	○	
51	日向後原	古　墳	上位段丘	◎				方形周溝墓状遺構の一部
52	野毛良	集　落	上位段丘	＊		○	○	
53	下原・賽神	集　落	上位段丘	○	○	○		
54	堀谷戸	集　落	丘　陵			○	○	
55	西殿	集　落	丘　陵				○	
56	野殿天王塚古墳	古　墳	丘　陵			◎		円墳
57	岩井西ノ平古墳群	古　墳	丘　陵			◎		
58	大谷古墳群	古　墳	丘　陵			◎		
59	岩野谷57号墳	古　墳	丘　陵		◎			大形円墳（竪穴系石室、石製模造品）
60	少林山台	古　墳	丘　陵			◎	◎	12号墳（円墳、初期横穴式石室）、群集墳
61	屏風岩	古　墳	火砕流台地				◎	円墳３基、板鼻古墳群
62	立的塚(荒木塚)古墳	古　墳	火砕流台地		◎			板鼻１号墳（円墳、竪穴式石室）
63	観音塚古墳	古　墳	火砕流台地			◎		前方後円墳（横穴式石室）
64	平塚古墳	古　墳	火砕流台地			◎		前方後円墳（舟形石棺）
65	八幡二子塚古墳	古　墳	火砕流台地			◎		前方後円墳（初期横穴式石室）
66	八幡	集落・古墳	火砕流台地	◎	◎	◎		八幡古墳群
67	八幡中原	集　落	火砕流台地		○	◎	◎	
68	七五三引	集　落	火砕流台地			◎		
69	剣崎長瀞西	集落・古墳	火砕流台地	◎	◎		◎	剣崎長瀞西古墳(帆立貝式古墳)、積石塚、群集墳
70	若田	古　墳	火砕流台地		◎	◎	◎	若田大塚古墳（円墳、初期横穴式石室）、群集墳
71	本郷的場古墳群	古　墳	火砕流台地			◎	◎	Ｅ号墳(帆立貝式古墳、初期横穴式石室)、群集墳
72	めおと塚古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
73	相水谷津横穴墓	墳　墓	丘　陵				◎	
74	万福原古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
75	崇徳山古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
76	磯貝塚古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
77	二軒茶屋古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
78	北原古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
79	北川古墳	古　墳	丘　陵				◎	円墳（截石切組積横穴式石室）
80	下受地・十二	集　落	丘　陵	○				

◎大規模集落、古墳○小規模集落△遺構有り（土坑・溝等）　＊遺物のみ

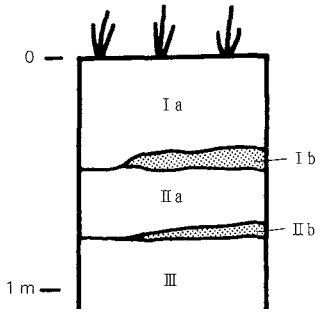


第２図　原市４号墳調査区設定図

Ⅳ 層　　序

原市４号墳の基本層序は第３図のとおりである。

鍵層となる降下テフラは、浅間Ａ軽石（As—Ａ：1783年降下）と浅間Ｂ軽石（As—Ｂ：1108年降下）が確認された。しかし、浅間Ａ軽石は後世の耕作などにより除去されており部分的に確認されるのみであった。浅間Ｂ軽石は本墳の周堀を中心に明確な堆積を確認することが出来た。



第３図　基本層序柱状図

第３表　基本層序土層説明

層番	層　　名	色　調	しまり	粘性	混　入　物			備　　考
					As—A	As—B	As—YP	
Ⅰa層	黒褐色土層		△	△	○			
Ⅰb層	灰白色軽石層	Ⅰa＜Ⅰb	×	×	◎			As—A純層
Ⅱa層	黒　色　土　層	Ⅰb＞Ⅱa	△	△		○		
Ⅱb層	灰褐色軽石層	Ⅱa＜Ⅱb	×	×		◎		As—B純層
Ⅲ　層	黒褐色土層	Ⅱb＞Ⅲ	△	○				古墳～平安遺構覆土

V　遺跡概要

原市４号墳は原市３号墳・原市５号墳と共に、昭和45年８月17日～23日（第１次）と昭和45年９月13日～15日（第２次）に、安中市教育委員会によって農地転用に伴う記録保存、と言うことで発掘調査が行われている。報告は昭和45年10月20日発行の『まえあし』第７号調査略報特集号（東国古代文化研究所）に掲載されている。この時の調査では墳丘・石室・基壇面の調査が行われ、古墳北側に周堀確認のためのトレンチを試みているが確認されていない。

今回は上記調査の未調査部分の発掘調査を行ったわけだが、基壇面、基壇葺、周堀を確認した。墳丘及び石室については、上記調査後に削平されていて、葺石の残骸などが確認された。また原市３号墳・原市５号墳は、上記調査時にすでに削平されていて、今回の調査でもその残骸すら検出することは出来なかった。

VI　遺構と遺物　（第４図～第７図）

基　壇　（第４図）

北側部分が一部攪乱を受けているものの、遺存状態は良好で直径18mを計る。中央部分には昭和45年調査時の墳丘及び石室の残骸が確認された。葺石は北面から南面に掛けて検出された。北側部分は攪乱の影響もあり葺石は乱れた状態で確認されたが、西面から南面の部分は遺存状態が良好で、40cmほどの高さに３～４段積みされた葺石を検出した。

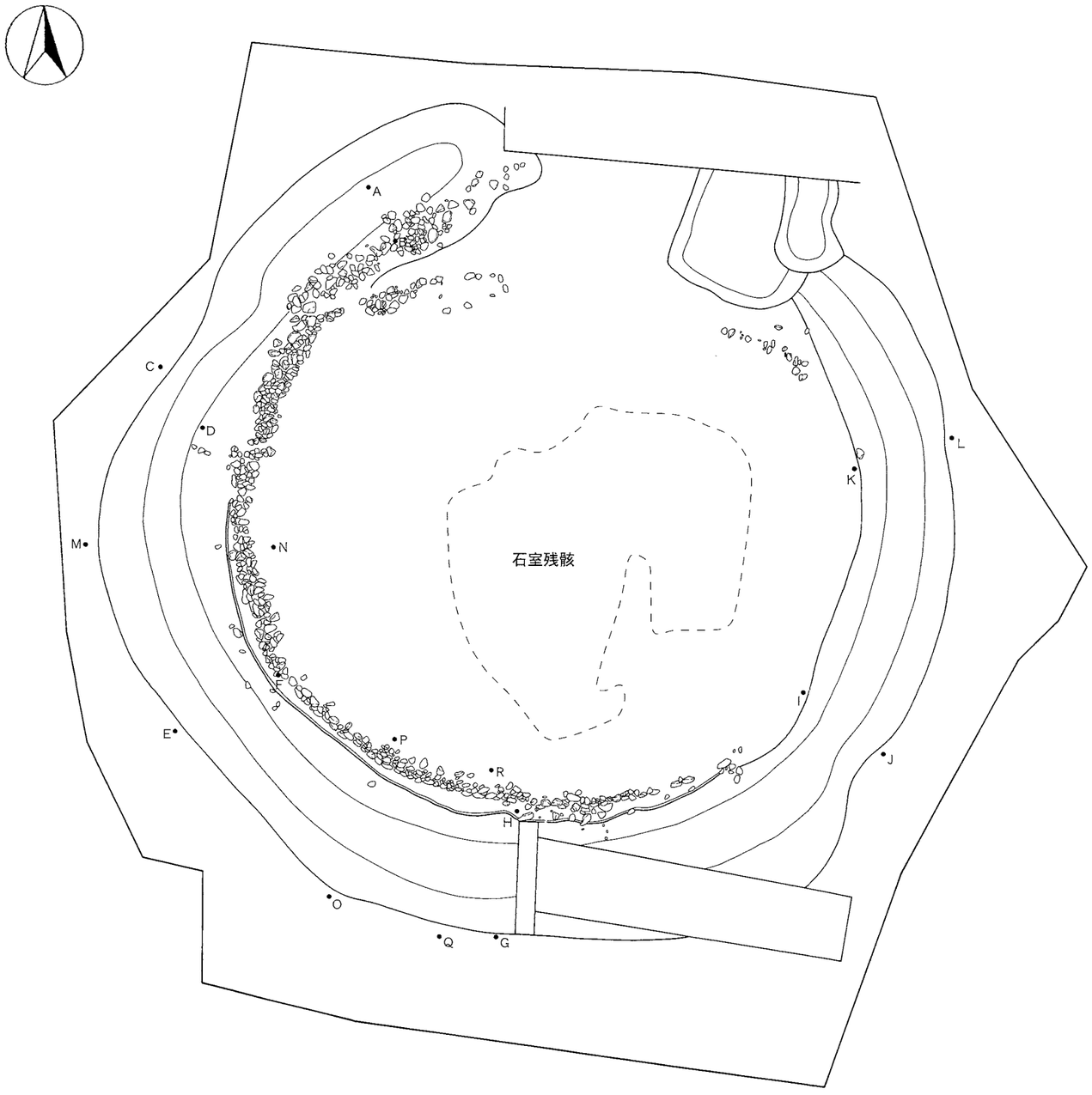
周　堀　（第４図）

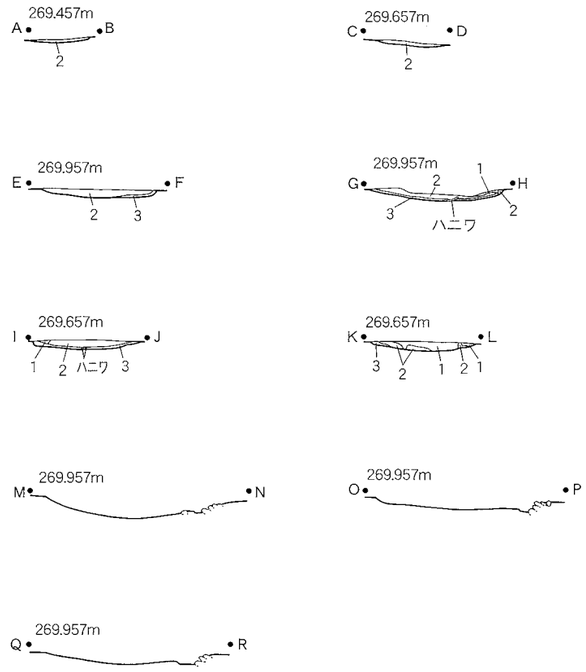
北側の攪乱部を除き検出された。幅約４m、深さ約50cmを計る。覆土にはAs―Ｂ純層のレンズ状堆積が観察され、堀底面からは基壇部から転落し流れ込んだ、と思われる円筒埴輪及び形象埴輪が出土した。

遺　物　（第５図～第７図）

昭和45年に調査されていることもあり、遺物の出土は少量であった。昭和45年調査の残骸部分を含めた基壇面からは遺物は検出されなかった。周堀からは、円筒埴輪及び形象埴輪が出土した。いずれも流れ込んだ様な状態で確認されており、墳丘や基壇部から転落したものの流込と推測される。

埴輪は昭和45年調査時にも多くの破片が出土し、朝顔型の円筒埴輪や形象埴輪片が多く検出されたようである。今回の調査でも出土量は少ないながら、家型形象埴輪や盾が検出された。

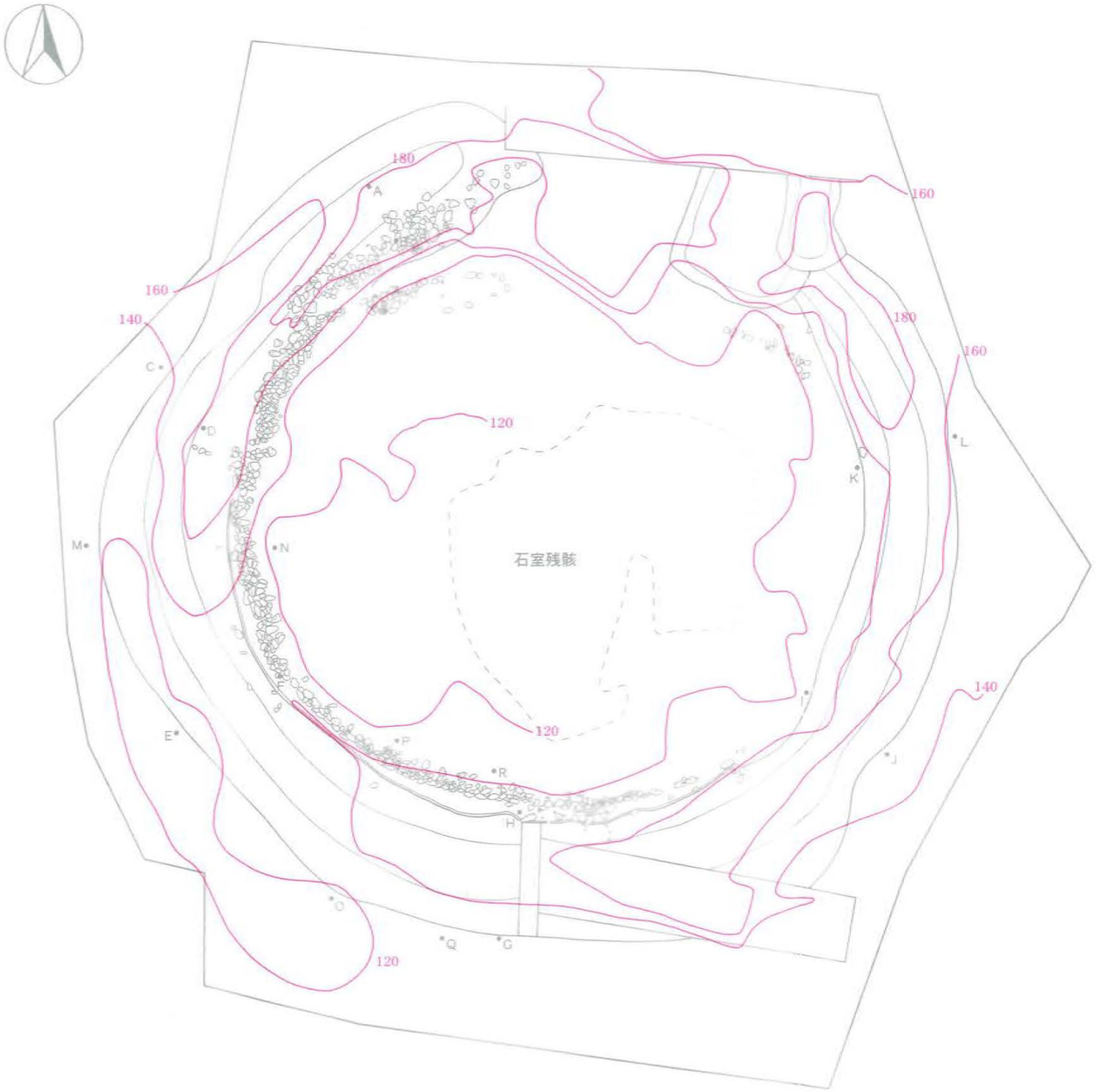


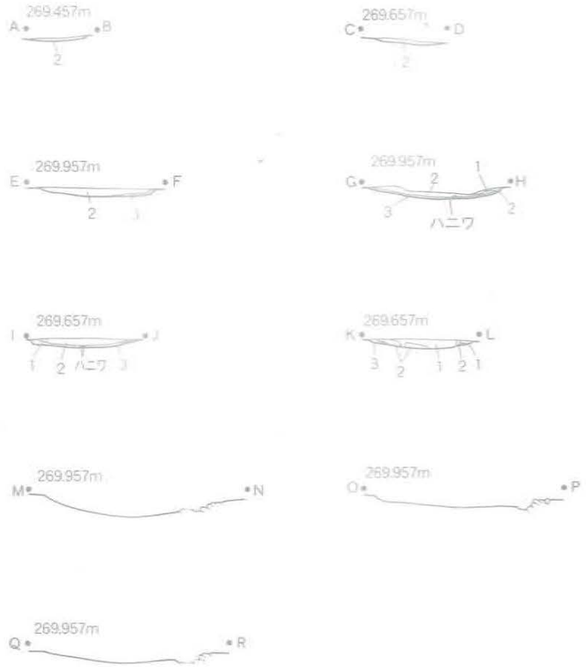


層番	層　名	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 As—B	備　考
1	10YR 3／1	黒褐色土層		△	△	○	
2	10YR 7／1	灰白色土層		×	×	◎	As—B純層
3	10YR 3／1	黒褐色土層		△	△	△	

0　1:160　8m

第4図　原市4号墳全体図

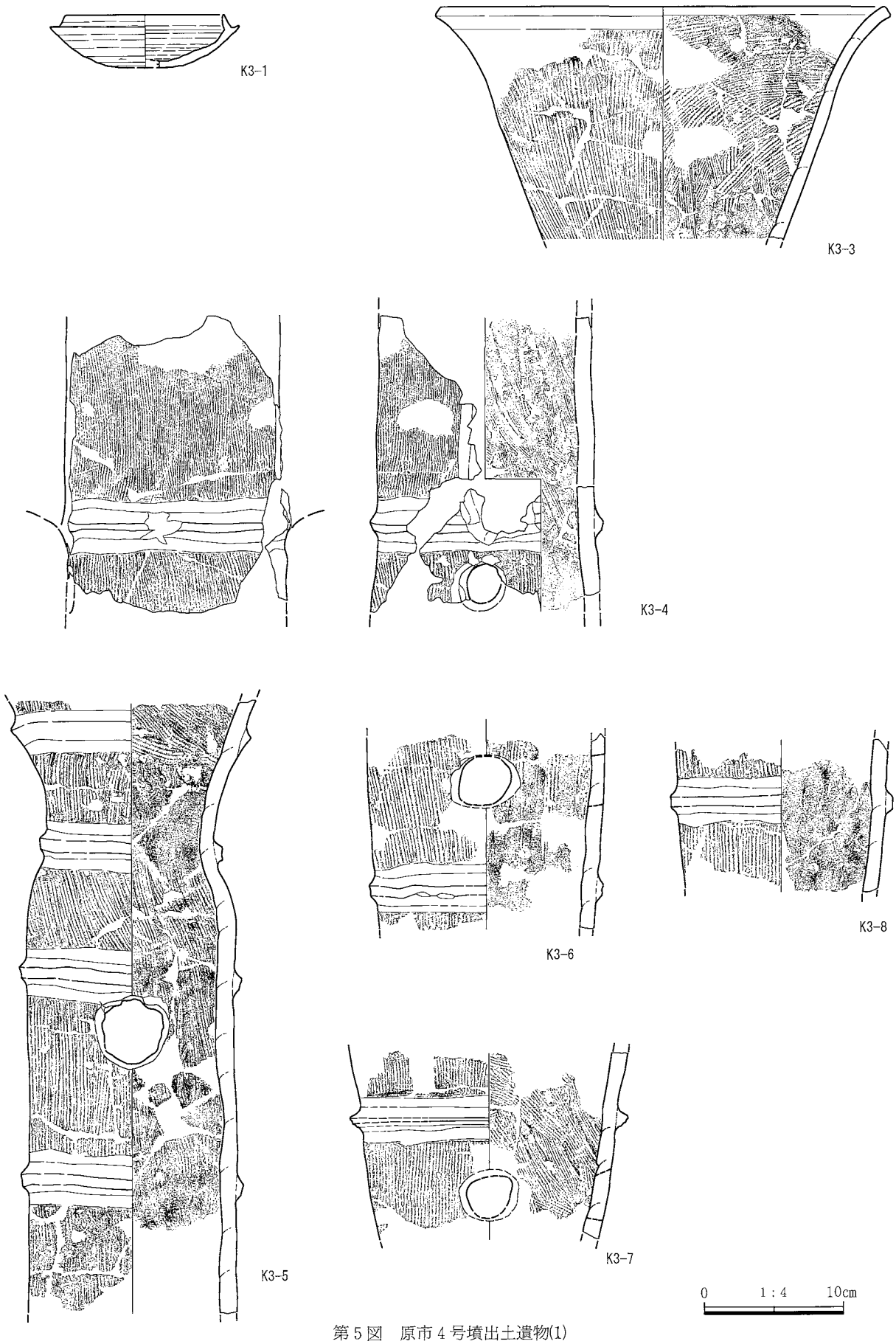




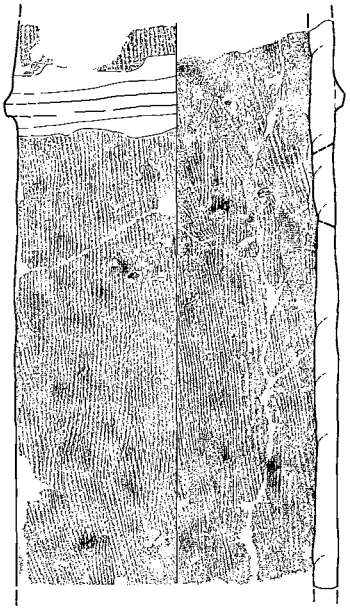
層番	層　名	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 As－B	備　考
1	10YR 3／1	黒褐色土層		△	△	○	
2	10YR 7／1	白色土層		×	×	◎	As－B純層
3	10YR 3／1	黒褐色土層		△	△	△	

0　1:160　8m

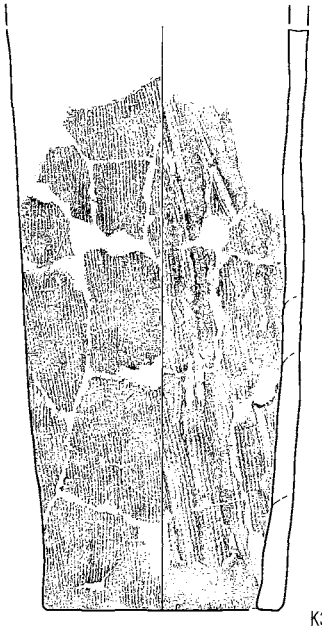
第3図　原市4号墳全体図



第5図　原市4号墳出土遺物(1)



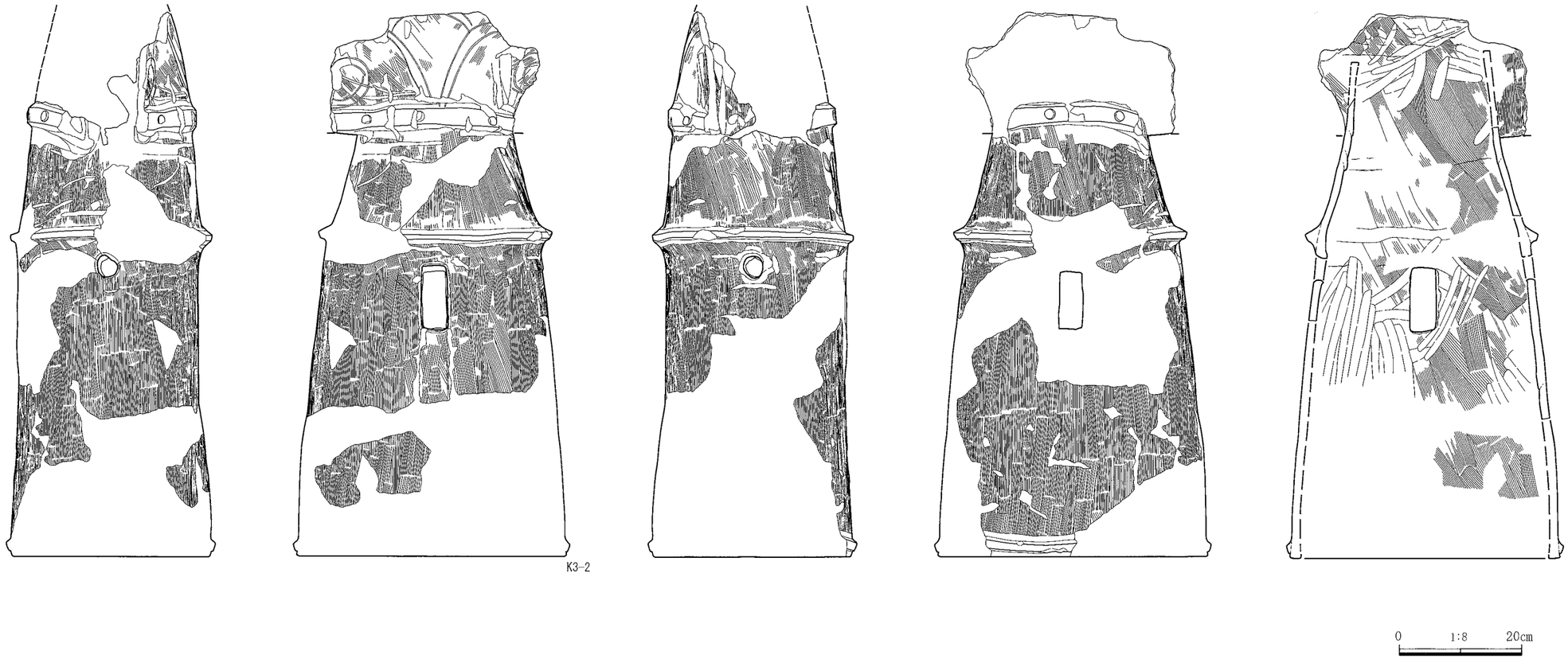
K3-9



K3-10

0　1：4　10cm

第6図　原市4号墳出土遺物(2)



第７図　原市４号墳出土遺物(3)

第４表　遺物観察表(1)

番号	器　種	法量(cm)	①焼成　②色調 ③胎土　④残存	成・整形技法の特徴	出土位置	時　期
1	須恵器　坏	口径　11.4 底径　— 器高　3.8	①還元　②灰黄色 ③白色粒・黒色粒 ④１/２	外面　轆轤整形、底部右回転篦削り。 内面　轆轤整形。		６世紀後半

第５表　遺物観察表(2)

番号	種　類	凸　帯		透　孔		胎土・色調	刷毛目	成形・整形の特徴	出土位置	時　期
		段間長	断面形状	形　状	縦×横		(1cm内)			
2	形象埴輪　家型	—	下側の低い弱い台形	—	—	白色粒・褐色粒・雲母 橙色	4	上屋根は一部が残存し、線刻により左右対称に蕨手様の模様が描かれる。身舎は間延びしており、壁面は隅丸を呈す。出入り口は高さ10.6cm、幅4.2cmの長方形の開口部である。		６世紀後半
3	円筒埴輪 朝顔型	—	—	—	—	白色粒・褐色粒・石英・礫 明赤褐色	4	外面　口縁部横撫で、縦刷毛。 内面　口縁部横撫で、上位斜め横刷毛、中位斜め縦刷毛、下位縦刷毛。		６世紀後半
4	形象埴輪　盾？	— —	下側の低い弱い台形	円形	—　×3.4	白色粒・黒色粒 橙色	6	外面　縦刷毛、縦方向に直線的な剝離痕あり。 内面　縦刷毛、凸帯から下は縦位篦撫で。		６世紀後半
5	円筒埴輪 朝顔型	— 14.9 9.1 8.2 —	下側の低い弱い台形	円形	5.2　×5.4	白色粒・褐色粒・石英・礫 明赤褐色	5	外面　縦刷毛。 内面　上位斜め縦刷毛、胴部縦刷毛、凸帯部分は撫で、指頭痕、下位篦撫で。		６世紀後半
6	円筒埴輪	—	下側の低い弱い台形	円形	(3.8)×5.0	白色粒・黒色粒・礫 明赤褐色	4	外面　縦刷毛。 内面　上位縦刷毛、下位縦篦撫で。		６世紀後半
7	円筒埴輪	—	三角形	円形	(3.7)×4.3	白色粒・黒色粒 赤褐色	4	外面　縦刷毛。 内面　斜め縦刷毛。		６世紀後半
8	円筒埴輪	—	低い台形	—	—	白色粒・黒色粒 赤褐色	4	外面　縦刷毛。 内面　縦篦撫で。		６世紀後半
9	形象埴輪 不明基部	— —	下側の低い弱い台形	—	—	白色粒・黒色粒・石英・片岩・礫 明赤褐色	5	外面　縦刷毛。 内面　縦刷毛、凸帯に指頭痕。		６世紀後半
10	形象埴輪 不明基部	— —	—	—	—	白色粒・黒色粒・石英・礫 橙色	6	外面　縦刷毛。 内面　縦刷毛。		６世紀後半

Ⅶ　成果と問題点

今回の調査により、昭和45年調査の補足を行うことが出来た。出土遺物は少なかったが、須恵器坏・円筒埴輪・形象埴輪の時期を見ると6世紀後半の時期であり、当時の資料を裏付ける結果となった。本墳構築時期は6世紀後半の時期が考えられよう。

また本墳については、前述した昭和45年10月20日発行の『まえあし』第7号調査略報特集号（東国古代文化研究所）以降、『群馬県史』資料編3「『総覧』原市町三・四・五号古墳」及び『安中市史』第四巻「原市四号墳」にも掲載されている。

今回の調査では墳丘や石室の状況は不明なため、その部分の補足も踏まえ、以下に『安中市史』を部分的に引用掲載しておきたい。

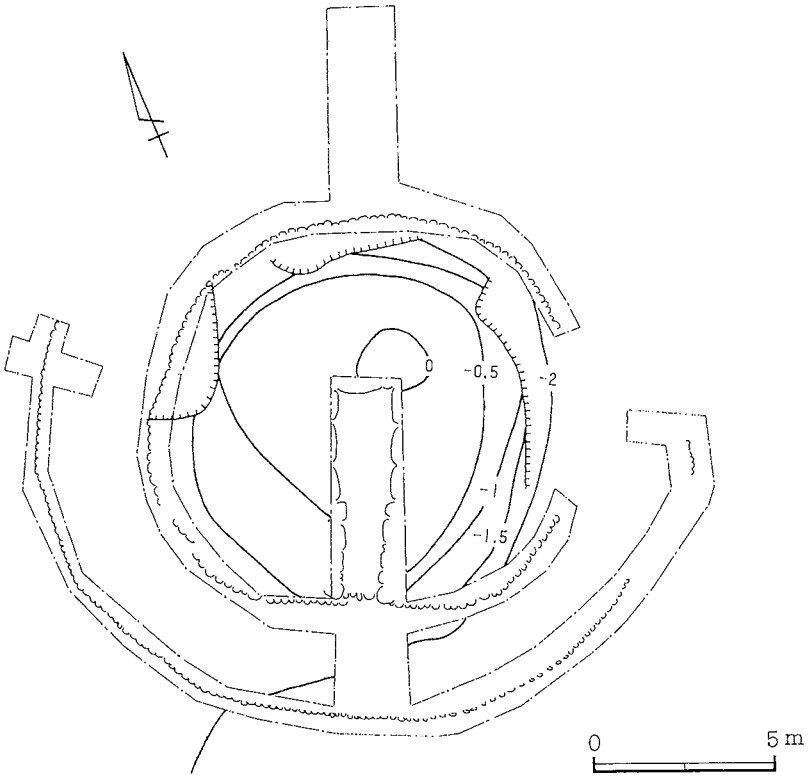
---------- 『安中市史』第四巻「原市四号墳」抜粋 ----------

墳丘及び外郭施設　本古墳は基壇を有する円墳であり、基壇を含めた径は約一七㍍、高さは約三㍍を測る。墳丘は葺石が施されており、石室入り口の左右は直線的に構築されている。さらに、その外側約三㍍をへだてて、葺石三～四段で構成されている基壇が確認されている。なお、墳丘の北側にトレンチを設定したが周堀は確認されなかった。

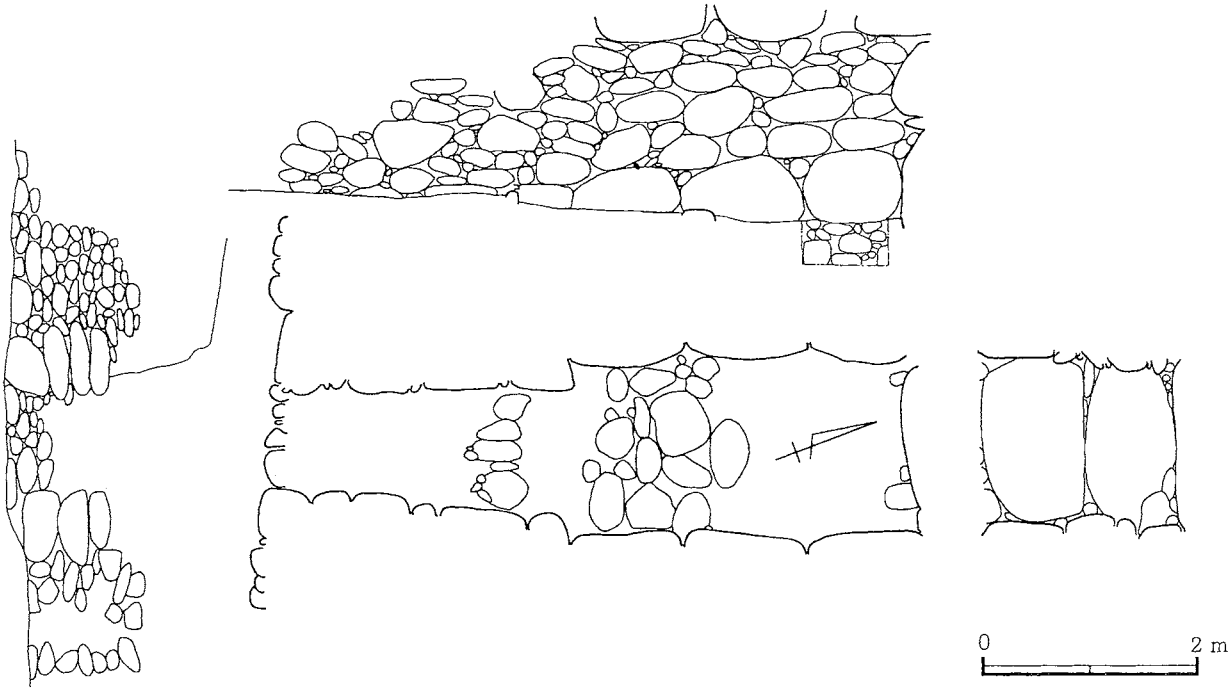
主体部　横穴式両袖型石室である。石室規模は全長約六・〇㍍、玄室規模は奥壁に向かって左側壁が長さ三・〇㍍、右側壁が三・二㍍、幅は奥壁で一・五三㍍、前側で一・六〇㍍、天井部で一・〇㍍、高さは約一・八㍍を測る。さらに羨道部は左側壁で長さ二・七五㍍、右側壁で二・八㍍、幅は奥で一・一㍍、入り口部で〇・九㍍、高さは奥で一・〇㍍を測る。石室はS―22°―Wに開口する輝石安山岩の転石を使用した両袖型横穴式石室であり、平面形態は短冊形を呈する。また、羨道の平面形態は玄室に向かってやや「ハ」の字形に開いている。玄室は両壁とも大きめの三石を基底石にして、その上に小ぶりの石を横積や小口積に置き、乱石積みに構築し、壁面は持送りの傾向を有する。奥壁は大ぶりの二石を平積に積み上げている。天井石は現存で三石が確認されている。羨道部では玄室寄りに楣石が設置されているのが確認された。また、玄室床面には径〇・五㍍から拳大の扁平な転石を敷き詰めている。玄室入口と羨道入口の手前〇・四㍍の間に小石を詰めて閉塞しており、入口と奥の部分に転石を小口に据えた石組が確認されたことから、閉塞形態は間詰めと考えられる。

出土遺物　すでに盗掘された後であったが、石室内より鉄鏃、轡、留金具、耳環、須恵器が、墳丘上とその周辺から埴輪片がそれぞれ出土している。

所見　本古墳は他の原市町三、五号墳とともに郷原古墳群を構成する小円墳であり、石室の構造的特徴から六世紀末～七世紀前半の構築と思われる。



第 8 図　原市 4 号墳全体図



第 9 図　原市 4 号墳石室展開図

参考文献

森田秀策　1970　「安中市郷原所在旧原市町三・四・五号古墳」『まえあし』第 7 号
調査略報特集号　東国古代文化研究所

森田秀策　1981　「『総覧』原市町三・四・五号古墳」『群馬県史』資料編 3　群馬県

福田貫之　2001　「原市 4 号墳」『安中市史』第 4 巻　原始古代中世資料編　安中市

発掘調査抄録

ふりがな	はらいちよんごうふんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	原市４号墳発掘調査報告書
副書名	鈴与トラックステーション株式会社ガソリンスタンド建設に伴う 原市４号墳埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	千田茂雄
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集期間所在地	379―0292　群馬県安中市松井田町新堀245
発行年	西暦2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原市４号墳 (はらいちよんごうふん)	安中市郷原字上平 (あんなかしごうはらあざうえだいら) 1347	102113	C―21	361820	1384928	20060228- 20060330	2,800㎡	ガソリンスタンド建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原市４号墳	古墳	古墳	古墳１基	古墳時代土器・埴輪	６世紀後半の古墳 大型の家型形象埴輪出土

写　真　図　版

遺跡遠景

遺跡全景

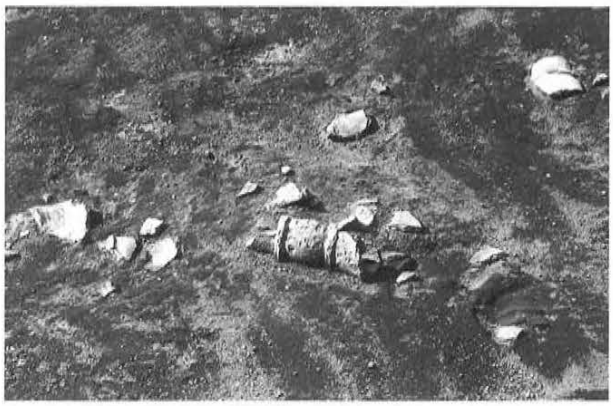
図版 2

原市４号墳全景

南側　葺石・周堀検出状況

北西側　葺石・周堀検出状況

西側　葺石・周堀検出状況



遺物出土状況

No. 1

No. 3

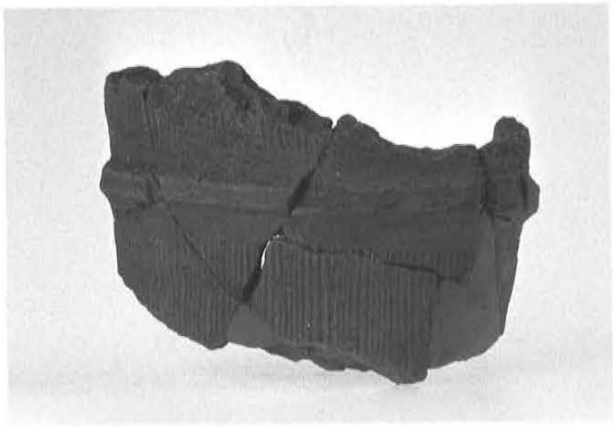
No. 4

No. 5

No. 6

No. 7

図版 4



No.8

No.9

No.10

No. 2

図版 6

No.2

原市４号墳埋蔵文化財発掘調査報告書

―鈴与トラックステーション株式会社ガソリンスタンド建設に伴う
原市４号墳埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行日　平成19年３月30日

編集・発行　安中市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県安中市松井田町新堀245

印　　刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67